



日刊紙「世界日報」の「オピニオン」転載

日本はこれでいいのか (V)

— 故中條高德会長追悼録 —

英霊にこたえる会第4代会長 中條高德

昭和を後代まで語り継ぐ

留めるべき日本の美質

縦と横で織りなす民族の絆

今からほぼ百余年前、つまり1世紀ほど前
わが国は国連を賭して大ロシアと戦った。

日露戦争である。それはほぼ500年間、
白色の国々による有色の国々を植民地化して
きた帝国主義的戦争の最終戦であった。

世界の大方の予想をくつがえして小国が大
ロシアに勝ったのである。

いまだに「コペルニクスの転換」と世界は

讃えている。トルコには乃木通り、東郷通り
があり、北欧には東郷ビルがいまでもある
程である。

とりわけ植民地化されていたアジアの国々
の指導者たちに与えた影響は計り知れないも
のがあった。孫文始めアジア各国のリーダー
達は陸続とわが国に学びにやってきた。

昭和初年、わが国のリーダー達は「五族協
和」の旗印を掲げて満州を中華の人達が北狄
(北の野蛮人)と呼ぶ化外の地に建国した。

世界から注目され始めていたわが国は、昭和
12年支那事変に突入し終わりなき泥沼戦を続
け、昭和16年12月8日、英米各国を敵として

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖国神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

新たな国立の戦歿者追悼施設は、
心ある多くの国民の声と力を
結集して、断固阻止しましょう。

「大東亜戦争」に突入した。昭和20年8月15
日ボツダム宣言を受諾し戦に敗れた。今から
68年前である。

月日の流れは容赦なく、この戦争に参加し
た兵たちや、その時代、銃後を守った母親た
ちは次々と彼岸に旅立つ。

終戦時、陸軍士官学校に学んでいた筆者も
86歳になった。陸続と戦友が死の旅につく年
頃となり、鳴長明の「方丈記」がしきりと頭
をよぎる。

「行く河の流れは絶えずして、しかも、も
との水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、
かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる
例なし。世の中にある、人と栖と、またかく
のごとし。……四十あまりの春秋をおくれる
間に、世の不思議を見ること、ややたびにな
りぬ」

鳴長明の倍程生きてきた筆者にも「世の不
思議」がよく見えること屢々なれば、命果つ

る迄、筆が続く限り、読者と「世の不思議」を探求していこうと思う。

民族の誇りの喪失

筆者の生まれた昭和の初年は世界の大不況に巻き込まれ、総じて貧しかったが、日本人は凜として生きていた。

子供たちに日露戦争の意義など分かるう筈がないが、奉天戦の3月10日は「陸軍記念日」、日本海海戦勝利の5月27日は「海軍記念日」だった。いずれの日も前戦で戦った軍服を着た兵隊さんが学校にやってくるまで意気揚々と武勲を語り、生徒たちは拳を握って晴れやかに聞いていた。

村や町の到る所に「忠魂碑」や「慰霊塔」や護国神社があり、自分に代わって戦死された方々に感謝の誠を込めてお詣りしていた。

戦争を讀んでいたのではなく、国家の危難を吾に代わって戦ってくれた犠牲者に対する敬虔な感謝の祈りであった。弥生時代の昔から稲作りに生きてきたわが民族だけに、豊年満作の収穫を明日に控えて、3・11震災のような天変地異で全て流された切ない経験を幾度か持ったに違いない。その時われわれの先人達は、無念だが、自分達の手の及ばないエトパス(何か)、村上和雄筑波大学教授の表現

を借りると「サムシング・グレート」がやってきた仕業と捉えた。判り易く言えば、現実

に生きる自分を限りなく謙虚に低きに置き、つまり想念の中に神・仏を設定し、その仕業と解釈して生き抜いてきた。

即ち、わが民族の神は西洋宗教の説く「ゴッド」ではなく、日本語で表示すれば「上帝」程度のものであり、神も仏も極めて至近距離に捉えていた。仏法のメツカ高野山には境内に神社があることに気づいてほしい。

戦前の家庭では殆ど全ての家に神棚と仏壇が並び、天皇・皇后のご真影が飾られていた。貧富を問わず「先祖を大切にしない」とか「誰が見ていなくとも悪い事をすれば太陽が見てござる、神様の罰が当たる」と説いていた。お盆にはお墓に先祖さまをお迎えに行きなさいとまるでお墓の中に先祖が生きているように話していた。

筆者はこの生き様を「わが民族の縦糸の絆」と呼ぶ。又わが民族「古事記」や「日本書紀」にあるように稲作りをしてきた。田植への労働の厳しさは、共同作業の気づきになり、田植えは前後、両隣りの手を借りてやってきた。次の日は隣の田植えをするのだから総労働量は変わらないのだが、この生き様が、

この民族にしたたかな横の絆の構築を恵んでくれた。

わが民族の特長・美質如何と問われたら、「私の着ているオベベ(着物)よ」と答えればよい。機械機に縦糸を張り、箆に横糸を入れて「織りなしたものの」がわが民族なればこそ、恥の文化として紡がれてきた。そんな事をすれば先祖に申し訳ない、子孫に恥を残す隣人に笑われる。法律がなくとも秩序の保てる唯一の民族となった。経営で言うベクトルの強い民族ともなっていたのだ。占領にあり徹底した日本研究した占領軍はこの「民族の美質」を徹底的に破壊したのだ。

桜の花に想う日本人の心

物のあわれを知る潔さ

美しの国、心美しい人造りを

一、日本は美しの国

今年の靖國神社の桜も、千鳥ヶ淵の桜も、花の命が長く、そして美しかった。

そもそもわが国は、四季に恵まれた美しの国である。寒い冬が去れば、やがて木々の芽吹く春がやってくる。山や野が芽吹く頃は、まさに「柳緑花紅」の季節で、一勢に花々が

開き、桜の花も咲き競う。

周りの山野に桜花繚乱の気が満ちる時、日本人はなんとも言えない幸福の気分を満たされ、日本人に生まれてよかったなあという心の燃えるような感動が湧き起こる。

かつて本居宣長は「敷島の大和心と人間わば朝日に匂う山桜花」と詠い、日本人の心の根幹にある「大和魂」を桜に託して説いてみせた。桜の花のようにあざやかに咲き、パツと散る潔さこそ武人の誉れ、誇りであり、日本人固有の「恥の文化」の源であると説いた。また宣長は「物のあわれ」を知ることが、人として生きるうえで欠かせぬことだと説いた。「物のあわれを知ることおしひろめなば、身を治め、家をも、国をも治むべき道にも、わたりぬべき也」と。

かつての戦争に臨み、たとえお国のために己の命を絶つことがあっても、「靖國神社の桜の下で会おう」と誓い若者たちは戦場へ赴いた。桜の花に己の運命を託すとの心情は「物のあわれ」を知る武人の矜持を語って余りある。平和ぼけした人達には思いも至らぬことかも知れないが、宣長の賢さがなくとも、筆者たちの如く身を国のために捧げんとした決意をした経験を持つと、桜の花が「物のあわ

れ」を知ってこそ深く生き抜くことが出来ることを無言の裡に語りかけているのが自ずと判るものだ。

二、桜と靖國神社

六十四年前、日本を精神的カルタゴ体制にしようとして、GHQ（占領軍総司令部）は靖國神社を焼却しようと考えており、ローマ法王支庁のヴィツテル神父の提言によって命拾いをしたことは歴史の真実である。

共に散り 共に語らむ 靖國の桜花

みな靖國神社の桜の下で再会しようとして誓い合ったものだ。今となつては、釈超空の如く「たたかひて果てし子ゆえ身に沁みてことしの桜あはれ散りゆく」と折角迎えた養子が、かの硫黄島の激戦で喪った悲しみを桜のあわれに託したのと同じように感ずる人も少なくはあるまい。

「咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花の上かな」。藤原公任が撰じた「三十六人撰」の中の女流歌人が詠んだもので、わが子を亡くした彼女が京都東山の清水寺に籠もり、亡き子の冥福を祈った歌である。

これらの歌でも判るように桜の花は、日本人の魂の琴線に触れるなんとも名状しがたい感情、感性を呼び覚ましてくれるものなのだ。

三、桜を植える会

筆者は杏日本一の花の里に生まれた。四月半ば十万本を杏の花が一勢に咲く桃源境である。花は全て好きであるが、その中でも桜には殊の外思いが深い厚い。

士官学校では「振武の台の若桜」と校歌で唄い、兵科は歩兵であり「万葉の桜か襟の色」と歩兵の歌も桜であった。

戦後の学習院の校章も奇しくも桜であった。桜を愛で、桜を育てる心とは、まさにこの日本の美しき風土、自然に対する思いを深めていくことに他ならない。

「桜を植える会」で全国各地に桜を植え続け始めた。島崎藤村の「夜明け前」で有名な妻籠の宿のある「南木曾」や「日光」「信州高山村」「湯河原」「中伊豆」などなど桜を植える場所は日本全国に拡がっていく。

四、京都青蓮院門跡と桜

四月十日の京の空は飽く迄も碧く澄み、まさに春爛漫京の都は桜で埋まっていた。

この日は天皇皇后さまのご結婚五十周年のめでたい日でもあった。しかも天皇と従兄弟の東伏見慈晃氏が門主をお勤めになられる名跡青蓮院門跡の青不動明王の御開帳を記念しての桜植樹の記念式典の日であった。

寺域には四百年を超えという楠の木が亭々として聳え歴史の古さを物語る。

又久邇家の菩提寺でもあるので、薩摩の島津家からお興入れされた時の丸の十の字の島津の紋章の入った御興も飾られている。

この日全国から集まる者百二十六名。

青蓮院の境内でもある山上の千日堂將軍塚は京都市街を一望に見下ろす絶景の地であり、桜、桃が満開であった。

東伏見門主のご説明によるとこの「將軍塚」桓武帝の時、忠臣和氣清麻呂がこの將軍塚にて平安遷都をおすすめした場所という。

その由緒深き場所に、かの丸山公園の枝垂桜の孫苗を二十五年有名な桜守りが丹念に育てたという立派な桜を植えることが出来た。

吾々の心をこめたこの桜がすくすく育ち、そのように国栄え、皇室の弥栄、世界の平和を祈る東伏見門主をはじめお坊さんたちの読経の声が心地よく今も耳朶に残る。

「散ればこそいどと桜はめでたけれ 浮き世になにか久しかるべき……」

花いっぱい美しい国づくりをし、そこに住む日本人が足るを知り、心美しく、凜として生きる様な人造りに残りの人生をかけた。

故中條高德会長を偲ぶ会

追悼のことば

中條君、心からの親愛の心を籠めて、敢えて中條君と呼ばせて頂きます。

中條君、五年半余に及ぶ英霊にこたえる会長としての身を挺してのご活躍、本当にありがとうございました。この間の絶大な御功績に唯々頭の下がる思いです。

昨春から体調を崩しながら、第40回総会、靖國神社の春・秋季例大祭、崇敬奉賛会総会に盡く出席し、特に第39回全国戦歿者慰霊大祭では力強く「祭文」を奏上された中條君、君の健康状態に、一抹の不安を感じお会いする度に、無理をしないようにと言いつつながら、順天堂医大の天野教授の執刀で心臓の手術を受けられた際、「百歳まで大丈夫」と言われたとの言葉を信じたいと、願っていた私にとりまして、正月早々の朝刊で君の訃報を知ったときの驚きは、言葉に言い表すことができません。

私の後継をお願いした時、即答を避けた君は、南部靖國神社宮司の逝去に接し「4代目会長」を「天意」と捉え、心よく承諾してくれました。そして就任早々から、各方面の活

名誉会長 堀江正夫

動に極めて多忙な身を、会の運営基金源や靖國神社への特別奉納金となる靖國カレンダーの頒布をはじめとし、本会の運営に身魂を傾け、その陣頭に立って御活躍頂いたことは、全会員が心から感銘していたところであります。

しかし、まさか百歳を目前にした私が一廻りも若い君の遺影の前に立って、こうして「お別れのことば」を述べることになるうとは……中條君、私は君に「私に対する追悼のことば」をお願いしておくつもりでした。

靖國神社の近くに居を構え、毎朝靖國神社に参拝することを日課としていた中條君、君の魂は、今、靖國神社の社でご英霊と共に、わが国の行く末をいつまでも見守ってくれます。でしょう。

靖國の 御霊に思い 残しつつ

一足先に 君は旅立つ

中條君、本当に御苦勞様でした。有難うございました。安らかにお眠りになり英霊にこたえる会の将来をお見守りください。

平成二十七年四月二十三日